

中世 開港みなと尾道〜大田莊^{おおたのしょう}の倉敷地として

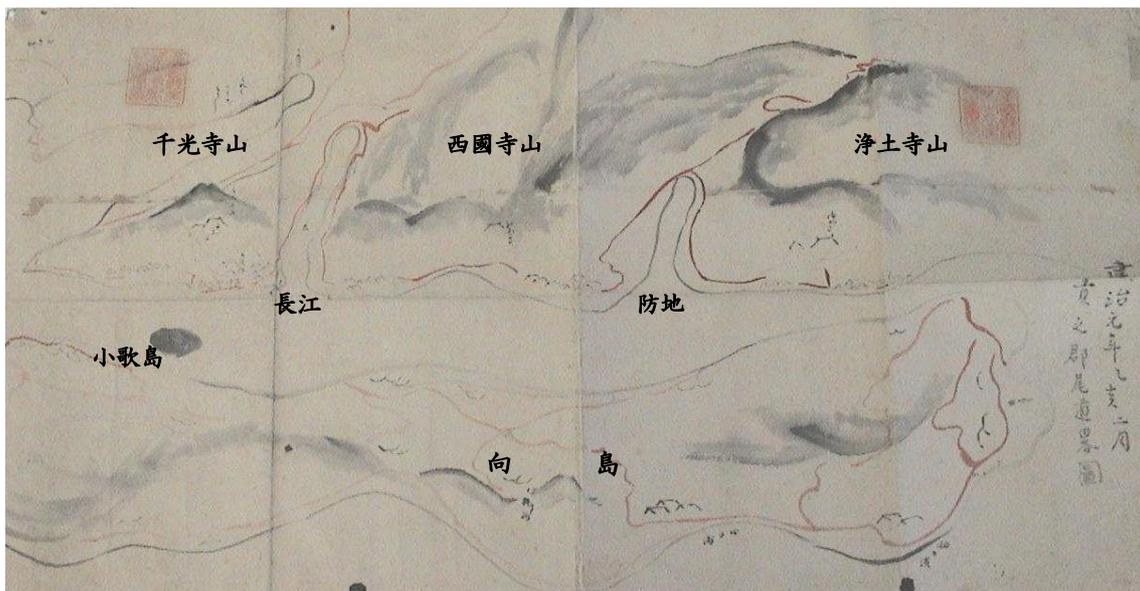
瀬戸内の一漁村に過ぎなかった尾道が、嘉応元年（1169）を境に、にわかには活気づいている。かつては漁をする小舟しか見えなかった尾道浦には、大田莊（世羅町）から高野山（和歌山）へ納められる年貢米を運ぶ輸送船の帆が連なる。

後白河院（讓位後の後白河天皇）から高野山の手に移った備後大田莊一。その直轄倉敷地としての機能を、尾道浦が担う事になったのである。嘉応元年（1169）、それは尾道浦の倉敷地指定が認可された年であり、それはまた歴史に残る尾道開港の年ともなった。

大田莊から御調を下って尾道へ運び込まれる年貢米は、年間1840石余4600俵程で、米のほかには胡麻（ゴマ）なども含まれる。年貢は中継ぎ基地である田畠5町の尾道倉敷にて一時保管され（倉敷の正確な所在地は不明だが、青木茂氏は『新修尾道市史』の中で長江を第一候補としている）、出航に良い時期（気候等）を見計らって海路紀州へ。紀伊湊（和歌山市、中世の段階は紀ノ川を遡った位置と推定される）がその着岸地であり、そこには高野山の総倉敷・政所が設置される。

海上輸送を引き受けるのは、「問」・「問丸」・「舵取り」と呼ばれる海運業者であり、彼らは元々莊園領主或いは莊官の下で、輸送管理の任にあたっていたが、港の発展によって或る者は海運業者として、また或る者は貨物の仲買人として、次第に港の商人へと独立し、その中には大きな富を蓄える者も出て来た。

ここに港町としての基盤を整え、尾道は更なる黄金期に向けて歩み始める。みなと尾道、歴史海事都市の始まりである。



鎌倉中期・建治元年（1275）のものと思われる「真之郡尾道略図」※地名は加筆

尾道市立中央図書館蔵、写真提供：尾道学研究会デジタル・アーカイブス

中世 『道ゆきぶり』に見る尾道浦の風景

…入海のうちつゞきて磯ぎわはるかに行めぐる、あまのすみかどもの山もとちかきも、げにかたゞよりありと見ゆ。足引のやまわけくだりて、おのみちの浦にいたりつきぬ。この所のかたちは北にならびて、あさぢ深く岩ほこりしける山あり。ふもとにそひて家々所せくならびつゝ、あみほすほどの庭だにすくなし。西よりひんがしに入うみとをく見えて、朝夕しほのみちひもいとやはりかなり。風のきをひに従ひて、行くる舟のほかげもいとおもしろく、遙かなるみちのくつくし路のふねも多くたゆたみたるに、一夜のうきねする君どもの、ゆきては来ぬるかこの浮びありくも、げにちいさき鳥にぞまがふめる。たゞ此むかひたるかたに、よこほれる島山あり。むかし此所をらうじける人、和歌の道にすける心ふかきあまりに、おりたつ田子いりぬる海人までも、歌をなんよませつゝ待てけうじけるより、やがてこの所を歌のしまというぞ。しほやどもかすかにて、やきたつるけぶりのすえ物あはれなり。此島にしほやくたびに、一日二日のほどに必ず雨のふり待るといひならはしなり。げにもと覚えき。猶この南にはれたしまじまあまた見ゆめり、みちのくのしほがまの浦おほえて心あるあまもすむべかめり。よろづに付つゝ、こゝろのひまもなくて過行うちにも、をのづから心にうかび待るいたづらの藻屑ども搔きあつめ待るなり…

室町時代の応安^{おうあん}4年（1371）に書かれた紀行文の一節。

著者は文人ではなく、鎧^{よろい}を身にまとった武骨な武将であった。その名は今川貞世^{いまがわさだよ}、出家して以降の名を了俊^{りょうしゅん}という。足利氏の縁戚にあたる貞世が、残存する反足利の南朝勢力を一掃すべく、九州へ向けて遠征（陸路で西下）する道すがらに書き留めた紀行文が『道ゆきぶり』である。

抜粋した一文は、尾道浦へ至^{つづ}っての情景を綴る部分。

磯ぎわ（海辺）には「あま」（海民・漁民）の家々が見えるとあり、漁師町を主体とした港尾道の風景がそこにある。

「ふもとにそひて家々所せくならびつゝ、あみほすほどの庭だにすくなし…」

山の麓に沿って家々が所狭しと並び、網を干すほどの庭も少ないと、海と山に間近に挟まれた狭小な都市空間（当時は今以上に海と山の間が近かった）を、見事に表現している一文である。

「一夜のうきねする君どもの、ゆきては来ぬるかこの浮びありくも、げにちいさき鳥にぞまがふめる…」

舟から舟へ、小鳥の様に渡りゆく港の遊女達（一夜のうきねする君）を、何とも美しく描写している。『新修尾道市史』編著者の青木茂氏も絶讃している名文であり、単なる紀行文、道中記を超えて、文学（紀行文学）の域に達していると言えよう。

近世の内海航路で繁盛した御手洗^{みたらい}（大崎下島・豊町）同様、遊女が盛んに港内を往来していた様子がここに偲ばれ、出船入船で賑わう尾道浦の情景を、美しくも哀愁^{あいしゅう}じみた一文をもって伝えている。

続いて向かいに見える島は和歌が盛んで、後に「歌の島」と呼ばれる様になったとある。古く歌島と言った向島である。

向島では塩を焼く人があり、これは向島沿岸部で盛んに行われた製塩を指しているが、その煙が数日の内に必ず雨を呼ぶという。

中世 ^{けんみんせん} 遣明船と尾道港

遣明船とは、中国・明^{みん}の国との交易船で、勘合船^{かんごうせん}（勘合貿易）とも言う。室町時代の応永11年（1404）～天文16年（1547）の約150年間、19回に亘って行われた日明貿易・勘合貿易で活躍した木造帆船である。

交易では日本から刀剣^{とうけん}に硫黄^{いおう}、銅などの鉱物^{こうぶつ}、漆器^{しつき}や屏風^{びょうぶ}などが輸出され、明からは生糸^{まいと}、絹織物^{みんせん}、明銭^{えいらくつうほう}（永楽通宝）などが輸入された。



遣明船模型 10分の1

広島県立歴史博物館蔵、写真提供：広島県立歴史博物館

遣明船は尾道港にも碇^{いかり}を留めている。宝徳3年（1451）の記録に「十四日至備後尾道留二旬」と見え、尾道に至り20日間も逗留^{とりのりゅう}している（「允澎入唐記」）。

この長期停泊に関して、青木茂氏は『尾道市史』上巻（戦前発行の旧市史）の中で、「必ずしも風の都合ばかりではなく、山陰・中国の輸出向きの物資が、ここに集められたことを意味するに充分である」と解している。続けて「山名^{やまな}（当地方守護の山名氏）領の物資が輸出されたとすれば、ここに山名を背景とした、かなり大規模な商業行為が営まれていたことが考えられる」と、近世北前船以前の商港都市尾道の姿を、そこに浮かび上がらせている。

余談ながら、尾道浦を拠点の一つとした備後尾道を含む山陽地方を統括した守護・山名氏（持豊宗全）は、町内の大寺である西國寺に対して篤い庇護をなし、衰微していた西國寺の再興（堂宇の再建）をこの時代に果たしている。宗教的関心を上回る政治的仕事が、そこに意図されている事は言うまでもない。

遣明船の船団の内には、山名氏が出した船も含まれており（実際の船主は社寺や商人）、この内、尾道（新市域）船籍のものとして、以下のものが見える。

尾道 住吉丸 七百斛（700石積）

院島（因島） 熊野丸 六百斛（600石積）

以上、『戊子入明記』永享3年（1431）の記録より。

尾道 国料船 八百石（800石積）

以上、『戊子入明記』文正2年（1467）の記録より。

前の『戊子入明記』永享3年（1431）の記録には、「一、赤銅 但馬国美作国備中国備後国四ヶ国より、被仰付至尾路（尾道）出之」とあり、尾道の港から但馬（兵庫県北部）・美作（岡山県北部）・備中（岡山県中西部）・備後の赤銅が積み込まれた事を記している。

昭和39年（1964）2月、木ノ庄町木梨の山畑の崖から、7世紀から14世紀（古代飛鳥～中世室町）にかけての中国古銭が大量（53種7545枚）に発見されたが、或いはこれも遣明船貿易を偲ぶ置き土産であるのかもしれない。尚、木梨の地は、足利尊氏に従った備後の土豪（地方豪族）・木梨杉原氏の本拠地である。



木梨出土古銭

尾道市教育委員会蔵、写真提供：尾道市教育委員会

中世 海に生き海に闘った海人〜村上水軍

ここでいう村上水軍とは、因島を拠点とした因島村上氏である。

村上水軍は、愛媛側の能島（今治市宮窪町）、来島（今治市波方町）、そして因島の三島三氏によって構成される、瀬戸内の海に生き、瀬戸内の海に闘った海の武人（もののふ）である。

水軍という呼称と同時に、「海賊」というくくりも一方にある。海賊という語は、主に海上往来を妨げる、油断ならぬ存在として貼り付けられたイメージが強く（朝廷による海賊追討、秀吉による海賊禁止）、海におけるそうした力を見込まれ、内に取り込まれた形（軍事利用）にあって、水軍になるのであろう。尚、水軍なる語・呼称は、当時にあっては存在しない（後の研究上に発生）。

海の賊と烙印されど、彼らは無闇やたらに乱暴狼藉を働く悪党ではなかった。むしろ瀬戸内海を往来する船を守り、航路を先導する水先案内人であった。足利尊氏の水先案内を務めた吉和浦の海人（漁民）も、その一例であったと言えよう。

船の安全な往来を保障する代価として、彼らは警固料と呼ばれる通行税的なものを徴収した（そこから警固衆との呼び名もある）。その海のルールに従わない者に対しては、時に武力によって打って出るのである。

本家筋的な能島村上氏側の系図（『村上家系 付大嶋郡 村上』山口県立史料館蔵）によると、第62代村上天皇の子・具平親王から系を起こし、12代目（具平親王を1代目として）に南朝方の武将として知られる北畠親房を記し、親房の孫で村上家に入った村上師清の代（14代）に内海へ下って来たとする。その師清の子3人が、それぞれ能島、来島、因島へ続く村上三家を興したというのが、いわゆる村上氏縁起である。

かくの如き縁起の通り、三家が一つの源流に至るか否かに些か不透明さがみられるようだが、活躍に磨きがかかる戦国時代を通して、伊予守護家・河野氏の下、互いに同門同族の固い結束で繋がっていた事には異論がない。

しかし村上吉資は、河野教通に従って伊予を転戦するなど、河野氏忠誠を示す一方で、本土側にあっては備後守護の山名氏とも通じ、山名氏による遣明船の警備も担い、また、山名氏より恩賞として土地を与えられている。そして山名の後には大内氏と…。陸（おか）の為政者・権力者と巧みに交わる術に、因島村上氏は長けていたらしい。この点、それらと全く関係を持たなかった訳ではないが、独立色の強かった能島村上氏とは対照的であったといえる。

村上吉充（義光）の時代が、因島村上氏の全盛期であった。吉充は小早川氏、その上に控える毛利氏に結びつくと、天正4年（1576）、織田信長軍と対した石山合戦における摂津木津川口の戦をはじめ、毛利・小早川勢くみに与して戦功を挙げている。

わけでも天文24年（1555）9月30日の巖島合戦（毛利元就軍と陶晴賢軍の一戦）では、村上水軍（三島村上が参戦）ここにあり、と言える勝ち戦を見せ、陶側の水軍を圧倒している。

この戦功により、吉充は小早川隆景から新蔵人の官職に推挙された。加えて、向島の知行（所領としての土地支配）を賜り、島の南東部、布刈瀬戸を望む要所である立花の観音崎に余崎城を築き、以後ここを本拠とした。後、吉充は因島重井の青木城へ移り、余崎城の守りは、家臣の島居次郎資長が務めたと伝える。



村上新蔵人吉充画像

因島水軍城蔵、写真提供：因島観光協会

因島村上氏は、本拠を因島の中央部に位置する「中ノ荘」（因島中庄町）に構え、集落後背に控える青影山の上に、青陰城を築いた。因島定着の正確な時期は分からないが、宝徳元年（1449）の段階で「中ノ荘」に落ち着いている事は、村上家菩提寺の宝鏡山ほうきょうざん金蓮寺（曹洞宗、因島中庄町）に残る薬師堂の棟札（因島領主村上吉資とあり）によって確認される。



浪分観音こと木造千手観音立像

光明寺蔵、写真提供：尾道市教育委員会

余談ながら、東土堂町の光明寺（浄土宗）に所蔵される木造千手観音立像（国重文、平安後期の作）は、この資長が寄進したものと伝え、一名を「浪分観音」という。念持仏として波風の難を除ける加護を得たというが、いかにも海人衆らしい俗称である。

豊臣秀吉の天下統一により、長い戦国時代に終止符が打たれたと同時に、水軍の時代もまた終わりを告げた。天正16年（1588）に秀吉が出した海賊禁止令は、海上往来を妨げる、油断ならぬ存在としての時代に立ち返った感がある。水軍組織の解体が、ここに着手されたのである。

因島村上氏のその後であるが、毛利方に忠誠を誓い、その家臣団に属し続けた因島村上氏は、毛利氏と最後まで行動を共にし、関ヶ原に敗北した毛利に従い、防長（周防・長門、山口県）へ退いた。以後、毛利藩の御船手組として、新たな活躍の場を見い出すのであった。

無難な最後となった因島村上に対し、片や能島と来島の村上は、時代の激流をまともに喰らい、とりわけ秀吉時代に大名にまで昇った来島村上氏は、下流へと激しく押し流されていった。

能島村上氏は、各地を点々とした挙げ句、山口の大島（屋代島）へ落ち着き、因島村上と共に船手組に加わり、余生とした。

時代の激流に押し流された来島村上は、関ヶ原の戦後処理にあたり、西軍に一時加担した事で、豊後国の山間部に位置する玖珠、現在の大分県玖珠町へ追いやられ、海人としての生き場所を失うに至るのである。

市内に遺る主な水軍関連史跡

- 青木城跡** 【因島重井町】因島村上氏の本城と伝える。県史跡。
- 青陰城跡** 【因島中庄町・田熊町】因島村上氏の筆頭重臣・救井義親の居城という。県史跡。
- 長崎城跡** 【因島土生町長崎】因島村上氏が因島島内で最初に構えた城とされる。県史跡。
- 美可崎城跡** 【因島三庄町三ヶ崎】通行税徴収担当の奉行として、金山亦兵衛康時が城番を務めたという。市史跡。
- 千守城跡** 【因島三庄町千守】元は竹原小早川氏一族の居城であったが、後に因島村上氏の武将・篠塚貞忠が居城したと伝える。市史跡。
- 幸崎城跡** 【因島大浜町才崎】村上吉房の居城。市史跡。
- 岡島城跡** 【向島町小歌島】巖島合戦の功により、向島を所領とした村上尚吉、吉充父子の居城。尾道水道を望む好立地に位置する。
- 余崎城跡** 【向島町立花】岡島城に同じく村上吉充の居城。後にここから青木城へ移転。
- 金蓮寺** 【因島中庄町寺迫】因島村上氏の菩提寺。墓地には歴代の墓が並ぶ。
- 白滝山** 【因島重井町】村上吉充が一族の繁栄を願って観音堂を建立したという。

◆水軍ミニ解説①…尾道水道沖に浮かんだ岡島城



尾道駅前から対岸向島を望むと、白い灯台の立つ、こんもりとした丘陵が見える。小歌島と書いて「オカジマ」、周辺の地名をそう呼び慣わす（中世には宇賀島と表記）。今は陸続きの丘陵にしか見えぬが、かつては独立した小島であった。

尾道水道に面した好立地のこの島に、因島村上の出世頭とも言える村上吉充（村上新蔵人義光）が、海城としての「岡島城」を築いたという。尾道水道を往来する船舶から、警固料としての通行税を徴収する恰好の場所である。

昭和6年（1931）に陸続きに埋め立てられ、次いで同時期に公園化、一部は宅地化されて変貌を遂げているが、数段にわたり郭跡、尾道水道に面する岩礁上に柱穴の跡がわずかに確認される。

◆水軍ミニ解説②…水軍時代の念仏踊り



8月盆の16日、因島棕浦町で、「法楽」或いは「チンゴンガン」と呼ばれる踊りが地区内各所で行われる。鉦や太鼓に合わせて、「チンゴンガン、デーボ」「ナムアミ、デーボ」と唱えつつ、円陣を組んで踊る。踊り手は、鉢巻き、たすきがけ、手甲脚絆に太刀を手にした姿で、抜き放った刀を天に突き上げる所作をする。

「ナムアミ、デーボ」は「南無阿弥陀仏」が訛ったもので、いわゆる諸国に伝わる念仏踊りの一形態であるが、ここでは水軍の出陣・凱旋の踊りであるとの由来を秘める。

同形態の踊りは、島内では外浦、重井、生口島では洲江に伝承されており、三原においては、害虫退散を祈る虫送り行事としての「チンコンカン」がある。

「法楽」の語は、足利尊氏が浄土寺観音の御前に、三十三首の法楽和歌を奉納したのにも見えるが、仏教における法会に際し、詩や歌を詠み、また楽を奏して仏を供養するという意味を持つ。

水軍の出陣・凱旋時にも踊られたのかもしれないが、海人達による祖先・新仏供養の念仏踊り（これが後に盆踊りとなる）こそが、法楽踊りの基本・根本の形であったであろうと想像される。